陶の土

水野仙子

一

それは私が九つの秋の思ひ出に初まると思ふ――その時分の私に取つて、最も嚴肅な意味を持つて居た學校でさへ、例年の通りその三日間はお休みといふのが、どんなに私達をしてお祭りを嬉しく、又有難く感じさせたことであつたらう！その言ひ渡しが先生の唇を洩れた時に、級中は自づからな歡呼の聲にぞよめき渡つた。やがて蜘蛛の子を散らすやうに校門を出た、私達は、てんでに己が町内の催しを自慢しあひながら、お互に氣色ばんで町の方へ出て行つた。殊に私には得意でならないことがあつた。私

のぐるりには四五人の友達が、私を覗き込むやうにして、交る〴〵いろ〳〵な問ひをかけた。その中にはいつも私と仲の惡い仲間の、間諜見たいなことばかりして居る、私の嫌ひな大きな子の顔も見えた。けれどもそれはやつぱり私と同じ町の子であつた。

『眞石さん、ほんとに役者あんた家(げ)さとまんの？』と、人が念を押すやうに私の前に廻つてかういふと、

『眞石さん、役者いつ來んの？今日？明日(あした)？』

と一人が草履袋の紐をくはへた後の早口で云ふ。

『眞實ともえ、おれげの表二階さとまんだア、あのない、みんなちつちやくつて、みんなおれつ位な踊りつ子ばかりなんだと、そしてみんな女なんだと、晩げの汽車で來んだと、おらおまんま喰べたら停車場さ行つて見つらい』

私の足は友達の足取りに搦められて重いやうに感じられた。一等賞を抱へて朋友(ともだち)に擁せられた優等生のやうに、私は得意と嬉しさを面(おもて)に漲らして歩いた。みんなの顔には羨望がもの言ひたげの眼をして居た。何がこの小さな心をかくまでにそゝりたつたのであらう。それは私の町内に催される踊り屋臺に乘る役者達の、三日間の假りの宿として私の家が町から選まれたといふことであつた。その頃私の家は町並みの二階建てに『諸國御商人御泊所』とした看板があげてあつた――。

ふと後から、『元町の　屋臺ちつちやエ　のない！』と聞えよがしに力を入れて云ふ聲が聞えた。みんなが振り向いて見ると、私達の後にはまた別な一群れがやはり踊り屋臺の話をしあひながら歩いて來るの

であつた。それは北町の子供達であつた。

『なんだあんな北町のぼつこれ屋臺！』と、いち早く私の嫌ひだといふ例の子が口を返した。

『あんな北町の屋臺の禿げつちよろけ！』

幼ない口爭ひがはしなくも起つた。

『うわアい、元町の役者のへつぽこ！』

『なんだ北町の貧乏町！』

私は北町の友達の中に、毎日私と机を並べて居る大仲善しの子の顏が交つてるのを見た。やはり元町を罵るやうな眼付きをして居た。いつの間にか常の仲間が入り亂れて、町と町との組（くみ）になつて居た。

私達はだん〳〵賑かさに近づいて行つた。山車（だし）も屋臺も出ぬ町の軒並みには、清らかな笹の葉がさや〳〵とさゝやきながら、竹から竹へとひいた注連繩の紙四手を搖がして居た。旗場に供へた御酒徳利の藍色模樣も今日は何となく神めかしく、はた〳〵と風にはためく幟（のぼり）を見上げると、神社の名の文字が墨痕淋漓（りんり）として空高く躍つて居た。

組みたてる槌の音のもどかしさに、日に幾度か出ては眺めた屋臺が、今日は思ひの外に捗つて、夜來の雨に濡れた今朝の見窄らしさは、見違へる程の裝ひをして町の中央に往來をふさげて居た。破風作りの欄間に躍る金龍の、擡げた腹の白さも氣味惡るく、炎のやうな紅い舌の彩りは、柱隱しの浮彫りと對に、紫の幕を絞つて下げた絹房の下から、赤地金襴の緣（へり）を取つた御簾が靜かに垂れて居た。朱塗りの勾

欄は袴のやうに威儀をたゞして、舞臺の兩袖には揚幕の代りに紫の布を垂れてあつた。年々に見馴れたその裝ひは、大人の胸をも浮きたゝせるやうに、何處となく活氣だつた家々の前を擦りぬけるやうにして、私は息をはづませながら家の中に飛び込んだ。

『行つて參じやした！』と鞄をかなぐり取つて框を驅け上がると、爐傍に尺度を取つて姉は揃ひの浴衣を縫つて居た。

『それ誰んの？』とおきまりのお八つを強請(ねだ)るのも忘れて私はその手許を見やつた。

『豐ちやのえ、さア肩上げをしなくちや、一寸立つて見イ』

私は姉の前に後向きになつて兩手を水平に延ばした。

『早(は)ア出來たの？これ今夜つから着んの？あしたつから？これ元の字ない』と私は嬉しさうに元の字の意匠を凝(こら)した浴衣をひねくり廻した。

男の子達はもうわい〳〵と屋臺のぐるりに寄つて來て氣早に太鼓を叩き出した。

その夕方提灯の光りのまだ落ち付かぬ頃、私は町はづれの停車場の柵につかまつて、背のびをしながら今着いた汽車の窓々を眺めて居た。丸元世話人とした弓張りをかゝげて、隣りの立花屋の小父さんともう一人の世話人がプラツトホームに立つて居ると、黒木綿の紋付きに白つぽい小倉の袴をつけた柔和な顏の男が、慇懃にその前に進んで腰をまげた。背の小さなだぶ〳〵とした腹に黒繻子の帶をしめた女は、背のひよろ高い撫で髮の盲目の手を取つて下りたつた。その後から騷々しく好奇の眼をあたりに配

りながら、十四五を頭位の六七人がぞろ〳〵とあちこちの扉(ドア)から現はれて來た。その中には一人だけ眼の大きい男の子が居た。着物は縞もあれば中形もあり、袖の短いの長いの、子供の目にもあまり見映えのする身なりではなかつた。方々の窓からは幾つも顔が折り重つてこの一行をもの珍しさうに眺めて居る。

何處やら普通の人達と顔の違ふやうに思はれたのは、みな襟元に固く束ねた鬘下地なのと、眉の剃りあとがいた〳〵しく青々として居るからであつた。

改札がすむと二人の世話人は言ひつけて置いた車を呼んで、一頻り荷物の世話などを燒いた上、小さい子は大人の膝に組ませて乘せて、自分達もその後の車に乘つた。私は立花屋の小父さんの膝に乘せて貰つた。車の脇には皆一本づゝの作り花が挿してあつた。

その夜から母や姉の忙しさは非常なものであつた。不在勝ちの父もこの四五日は、商賣には不似合ひな頤髯を撫でながら爐傍に默然として居た。ばん〳〵の青黒い動きのない顔にも、周圍の慌ただしさがいくらか影響して見えた。このばん〳〵と云ふのは、十二の年から三十年あまりも私の家に飼ひ馴らされた男で、私がまだその背中に負はれて歩いた時分、口がよく廻らぬまゝに人が番頭さんと云ふのを眞似て呼んだ言葉であつた。今ではそれが家中や近所の通り名となつて居る。それが適當なほど間の抜けた男であつた。

祭りに入る前夜は、笠揃ひと言つて三番叟の外に身の入つた一幕を打つのが習はしとなつて居た。表

二階に陣取つた踊り子の一行は、夕飯をすまして風呂に入ると間もなく、薄汚れのした肌着に着替へて、腹の太つた女に口やかましく指圖されながら化粧にかゝつた。私は妙にそわ〳〵とした氣分になつて、有り合ふ下駄をつつかけて表に出てみたり、一寸の間を盗んでは立て膝で煙草をつめて居る母の肩につかまつて見たりして居たが、時々は盗むやうに梯子段の仲程からそつと二階を覗いて見た。そのたびに私はいつも濁つた發音の鼻にかゝる話し聲を手近に聞いた。

『誰だ、そこに見でんなア』

鏡に顔を近く寄せて、眼尻りに紅を入れて居た男の子が、額を羽二重で締めた白い顔をふと此方に向けて言つた。みんなの顔が同時に振りかへつたので、私はハツとして首をひつこめた。

『下の子だよ』と誰かゞ云つた。

『おつきな眼玉の童(わらし)だな』と無遠慮な口を利く子もあつた。私は無性にきまりが惡くなつて、急いで梯子段を下りようとすると、

『危ぶながすよ、上つてみさつし〳〵』と、これも一座の一人だつた宜い加減の年の男が下から上つて來た。そして私の體を抱いて上にあげようとするので、私は、

『やアだ、〳〵』と體を揉んで逃げて下りて來た。そして暫く下でうろ〳〵して居たが、上つて見るのに好い機會を失つたことが悔いられて、取り返しのつかないことでもしたかのやうにもの悲しい氣分になつた。

屋臺の上には人の心をそゝるやうな寄せ太鼓が鳴り出して、踊り子の宿のしるしに、廂に一つぱいの花をさした二階を、表に立ちどまつて見上げて居る人達も出來た。

『先代萩だ、先代萩だ』と町の若者が勢ひよく驅け下りて表に飛び出して行つたあと、私は又そうつと引かれるやうに梯子段をのぼつて行つた。

『さア千代の、こゝさ來て坐れ』と、七つばかりの子が千松に扮したのを、例の女はキチンと自分の前に坐らせて、

『いづもンのとこ忘れんでねえぞ、さアコレはゝ様……云つてごらん』と言はれてその子は、斜(はす)かひにチラ〳〵私の顔を見ながら平氣な顔して、

『コレはゝ様、侍(さむらひ)の子といふものは、ひもじい目をするが忠義ぢや、又喰べる時には毒でも何とも思はず喰ふものぢやと……』

『お主(しゅう)のためには……』

『お主のためには喰ふものぢやといはしやつた故に、わしや何とも言はずに待つて居る、その代り忠義をしてしまふたら、早くまゝを喰はしてや、それまではあすまでもいつまでもかうキッと坐つてェ、お膝に手をついて待つて居ります、お腹が空いてもゥひもじうない、なんともないィ』

『さうだ〳〵なんともない……』と女も一緒に、

『こちや泣きはせぬわい……』と一緒になつて幼い身振りをして見せる。

『この鬘少し痛えぞ』と云ふ方を見ると、先刻の少年がきりゝとした女の装ひをして、見事な裲襠の裾を捌いて立つて、鬘の喰い入る蟀谷のあたりを押へて居る。その顔の意地わるさうなこしらへを見て、親しみのなさを覺えた私は、それが八汐と云ふ惡るい老女で、いとしい千松を殺すのに胸を躍らしてから、その後は此少年が何に扮しても、暫くはこの恐ろしい先入主が去らなかつた。

盲目の老人が三味線を持つて手を引かれて屋臺にうつると、仕度の出來た踊り子達は、前後して若者の背中に負はれて出て行つた。それを見るとて入口に群がつた人も、緩やかな木の音が一つ二つ聞え出すと、落ち着かぬものゝやうに一人去り二人去りして、屋臺の方に寄つて行く。

初秋の夜の空氣にしつとりと響く木の音が一つ〳〵に迫つて行つて、追つて〳〵最後の一打ちと共に幕はする〳〵と開いた。我を忘れたやうに姉と共に二階に驅け上つて見ると、寄せも寄せたる群衆が、暗い空の燦爛とした星の下に、仰向いた顔を眞白く見せて居流れて居る。屋臺に近い家々の二階には、屋根から廂から一ぱいに町の子達が埋めて居るが、踊り子の宿と云ふので此二階だけは誰が上るのも禁じてあつた

『オヽ可愛いらしィ政岡だこと！』と私の後にはいつの間にか母も立つて居た。

牡丹に元の字を染め出した赤い提灯がズラリと廂に下つて居る舞臺の上には、その裲襠に肩上げもざせたいやうな政岡が、とぼ〳〵と瞬く蝋燭の光りに、美しい打掛けの錦糸をきら〳〵させながら動いて居る。稍々程遠いこの二階にも、鶴喜代君や殊に千松の幼い臺詞が透るやうに聞えて來た。

『なか〳〵やっりやすね』と母は後片(あとかた)づけに殘つた男を振りかへつて感心したやうに云ふと、
『えゝ、あの八汐になつた子は一寸やりやすよ、十四でがすがね、あれがまあ座頭つていつたやうなもんで……政岡になつてんなア女でも一寸利けやす、何しろまンだほんの童(わらし)らだから……年の割にやでもやつりやすよ、大將なか〳〵やかましいから』と一寸小指を振つて見せた。
『なんだかみんな、しをすつて云ふやうだ』と姉が小聲で云ふと、
『あゝ會津訛りが拔けねんだ』と母も囁くやうに云つて笑つた。
更け行かうとする夜の闇を劃(くぎ)つた灯と、統一された澤山な視線との中に、美しく搖れて居る人影を見まもつて居るうちに、床から洩れる三味(いと)の音が殊の外に冴えて、情緒の籠つた義太夫の節廻しが、賺すやうに又うす甘く私の胸に泌み入つて、夢のやうにうつとりとなりかけた時、嘆きに溺れて居た政岡が後にほざく八汐と懷劍を閃かし合ふ場面の變りに、又はつとして向ふを見瞶める間もなく、一つ入る木の音と共に虛空をつかむ八汐の最後は、靜かに垂れ來る御簾に蔽はれてしまつた。ほつとしてぞよめき渡る群集を眺めて居ると、
『仁木彈正のとこまでやんねかつたんだナ、惜しいとこで切つたもんだ』と母は私の肩に手をかけて、
『さア今夜は是つきりなんだから、豐はもう寢んだぞい』と促したてた。
間もなく踊り子達は人々に背負はれて歸つて來た。千松は舞臺に殺されたまゝたわいもなく眠つて居たさうで、起されてつまらなさうな顏をしながら男に抱かれて來た。

ぞよ〳〵と散る人足を枕に聞きながら、私は間もなくいろ〳〵な期待を持つて眠りに就いた。

二

井戸の水の冷たさが、九月半ばの朝夕にはもう感じられるやうな國であつた。起きると直ぐに眞岡の匂ひのする揃ひを着せられて、赤い帶を締めて、毛糸の巾着には四五枚の銅貨を入れて貰つて帶〆めにその紐を絡(から)みつけた。さうして怡々(いそ〳〵)と先づ表に出て見ると、まだ眼覺めぬ屋臺を叩き起すやうに、折目だつた筒袖の揃ひを着た男の子達は、我勝ちに梯子をのぼつて樂屋の太鼓を叩いて居る。

二階の人達もやがて起き出した。今日は行き渡つた町の揃ひを着て、年嵩(としかさ)の者は小さな者の世話をしながら、顏を洗ふやら、手束ねに髮を結ぶやら、一頻りがや〳〵と賑はつて遲い朝飯がすむと、御内陣拜禮と云ふて藝子一同と町内の子供連中が、男も女も打ち交つて鎮守の杜に參拜するのであつた。今日が宵祭りで、あしたは本祭り、三日目が後祭りなのである。

私には段々いろ〳〵なことが解つて來た。紋付に袴を履いた男が座元で、腹の太つた女はその内儀であること。雜用を足して居る男をみんなが留さア〳〵と呼んで居ることも、踊り子達のそれ〴〵の名前も。そして時々はその一人二人と口を利き合ふこともあつた。踊り子達は座元夫婦を『お父つさ』『おつ母さ』と呼んで居た。かう云ふ一座によく見ることで、それは皆貰ひ集めた養女だと云ふことは、私がもつと大きくなつてから知つたことであつた。振り付けは母親が時々、不格好な躰に似合はないしなや

かな科(こな)しをして見せて居るのを見た。間々(あひだ〳〵)には小さな子の袖に手拭ひを掛けて、それを振り袖の心で踊らせて居ることもあつた。總じて口やかましく嚴(きび)しく、上の空(うはそら)で稽古をしたといつて、一人朝飯を殘されて泣いて居るのなぞも見た。

ドヽンキドンキドンキ、ホラヨイサァー、ヨイサ、ヨイサ、ホラヨイサァー、幾十とない聲の調子に乘せられて、ギイ〳〵と重々しく搖ぎ出す屋臺の上には、揃ひも扇を披いて振つて、ヨイサ、ヨイサ、と加勢の調子を張りあげる子供達の氣合ひを逃(のが)さず、紅白の布の縒り綱に鈴なりになつた壯丁達が、ねぢり鉢卷の尻からげ、或は自慢の片肌拔いで襦袢の袖の友禪に風を入れながら、ホラヨイサァーと喚き合せて曳いて行く。その屋臺のとまる先を豫め知つて居て、私達はいち早く其家の前に驅けつけるのであつた。

『二階貸しておくんなんしよ』と知つた家知らぬ家の境なく一言斷つてずん〳〵と上つて行く。それが習慣のやうになつて居た。時には最も見よい場所を取つて、何町御中、某町御中と張り札がしてあることがあつたが、それは日と時間とを決めて、町々の世話人を招待して見せる付き合ひの爲めであつた。

屋臺の位置がきまつて歩くために取られた兩側の飾りも出來ると、人夫が擔いて歩く大竿を幾つもの臺に乘せて早速の圍ひが出來る。その中に疎らに立つて見上げて居る在所者の品定めをしながら、私達は袂から栗だの葡萄だのを出して、幕開きまでの時間を喰べて過すのであつた。見る間に廂はそれらの殼で一つぱいになつてしまふ。時にはころ〳〵と轉げ落ちた梨の心が、道行く人の頭に當つて、慌てゝ

友達の袖のかげに首を縮める剽輕者もあつた。一金何十圓、某樓何子よりなどゝ、數限りもなく欄干の下に張り出した大袈裟な纏頭の評定にも飽きると、

『來た〳〵〳〵』と云ふことが流行(はや)り出す。それと皆が振り向く途端に、

『北の方から人が來たっ』と茶化すのである。騙されるとは知りながら、つひそちらを向く腹だゝしさに、葡萄の粒の種を掘つて、當座の鬼灯と餘念もなく鳴らして居るうちに又、『來た〳〵〳〵』と、口々に云ふ。半信半疑で振り向くと遙かに赤い襦袢の袖を片肌ぬいだ藝子係り――それは大抵徴兵檢査前の青年を選んだ――に背負はれて小走りに來るのが見える。

『お姫様、お姫様』と小春日和にキラ〳〵と耀く銀簪しにそれと知つて歡呼の聲をあげると、何時の間にか目の下は車馬の通行も出來ぬ程の人込みとなつて居る。赤地の振り袖を背負ふ人の胸に組みかけて眩しさうにおぶはれて行く踊り子を、

『あれお鈴つていふんだぞい』などゝ私は皆に教へた。

お鈴は妙に顔色のわるい、いぢけた喰ひしんぼの子であつたが、細面ての其顔立ては、お姫様になると見違へる程美しく見えた。聲も細く、病氣でもあるらしく絶えず咳をして、殊によると大切な科白の半ばに咳入ることもあつた位、慘めに痩せ衰へて居た。それが妙に私の心を引いて、絶えず其素振りを氣にして居ると、子供の目にも殘酷に思はれる程、母親はお鈴を慘(みじ)めに取り扱つた。自分の用ゐた衣裳の始末は勿論、姉共の脱ぎ捨ての始末もして、御飯はいつも後の方で喰べさせられた。

大事にされるやうに見えたのは、粂三といふ少年で、何事も眞つ先にされる權力を持たせられて居た。さうして粂三だけは小さな者を呼び捨てにして居た。

可愛いがられて居たのはおりんといふので、眼尻りの吊つた口のきりつとした、姉妹達に隨分小言も悪態も云ふけれども、その割りには意地の悪るくない、萬目の見るところ一番體の利ける子であつた。

體の大きいのはお才、道具の大きい顔だちで、衣裳が一番體にしつくり合つて見えた。

馴々しく私とよく話しをしたのはお京といふので、眼元の涼しい下脹れの、素顔の縹致は一番この子がよかつた。そして人好きのいゝ大様な、舞臺顔は女よりも勝頼とか三浦之介といつたやうなものが嵌つた。

年はお才の十五を頭に、粂三おりんの十四、お京とお鈴は十三、千代野の七つにおげんの六つといふ順序であつた。これらの子達の藝の出來不出來が、座元夫婦の愛憎を支配して居ることは爭はれなかつた。

先觸れの太鼓を打ち鳴らして眞榊や御旗の影が見えると、人々は羽織袴に威儀を正して町境までこれを迎へる。神輿が町内に入ると、一幕を奉納として打つて、あとは開けかけた幕も前通りの渡御がすむまではと禁じられる。白石噺揚屋の段としたビラが張られたまゝ、靜かに御簾の垂れて居る中から、信夫に扮したお京がちよこ〳〵と出て來て、私達の居る二階を覗いて居たが、そのうちに私を見付けてにつと笑つて舌を出して樂屋に逃げ込んで行つた。――私は今でも手拭ひを首に結んだその顔を忘れない

『ひつ込め！〳〵』

『二階を下りろ！〳〵』と警護の人達の聲がかゝると、私達は疊に伏して體を隱して暫くは息を殺して居る。やがて瓔珞の觸れ合ふ爽やかな金属性の響きが、肅々とした足音と共に通り去つた氣合ひがすると先を爭つて自分の場所に驅け戻るのであつた。

祭りの夜の賑はひは、空地〳〵を埋めた見世物小屋や輕業の大仕掛けに、蔀面白く夫婦掛け合ひに繪解きをする覘き機關（からくり）の、八百屋お七の戀の炎も恐ろしく、カンテラの吐き出す油煙は羽織も欲しい夜のそよ風に流れて、吹き矢の店には在所出の若者が、梨を射るとて犇めき集つた。一錢の文廻しに見ン事山を當てようと、クルリと廻せばドツコイと止まりさうにして外られてしまひ、思ひ切りわるさうに立ち退く小僧の後から、ヤッシヨィヤッシヨッと樽御輿擔いで子供達が、小生意氣に荒れて行く。

隣り町の山車などは見ようともせず、たゞわが町のものばかりをいゝものにして、屋臺のあとばかり追つて歩いた三日三晩、すつかり顏馴染みになつた踊り子に、私達はそれ〴〵な贔屓が出來た。女の仲間にはお京とお鈴とが持てた。男の子達は粂三とおりんの肩を持つた。私はおりんを好いてお京が懷しかつた。そしてお鈴を可愛いさうと思ふ一面には齒痒ゆいやうなもどかしさが好くのを邪魔して居た。

祭りの終りの夜が來た。

『もう一幕で千秋樂だ！』

煙管を爐ぶちに叩く音がして母の聲が聞えた。歩きくたぶれ見くたびれて、今し方家に歸つて來たま

ゝ、何時の間にか私は寢入つて居たものと見える。

『みんな小っちやっこい割りによくやっりやすねえ、大きくなつたら上手になっりやせう。來年更來年あたりが、屋臺に乘んにや丁度宜いあんばいでごすねえ、あんまり大きくつても屋臺にあまるやうでなんだげっと……』

『さうでごすねえ、よくあれまでに仕込んだもんですねえ、三日があひだ同んなじものは一度もやっりやせんぞい……ほんになか〳〵大抵であっりやせんのい』

話しをして居るのは懇意な家の内儀であつた。

『なにしろお天氣が續いてようごした、これで隨分町んにや金が落っちやしたっぺ』

囃しの音が俄に起つて賑々しいどよめきがだん〳〵と近づいて來る。

『あ、今度こそ千秋樂だ！』と母がまた獨り言のやうに言つた。その呟きがなんとも言はれない寂しさとなつて私の胸に沁みた。賑かな祭りの日、華かな祭りの夜の行く名殘り惜しさ！お京はあすからどんな衣裳をつけて、何處でどんな踊りをするのだらう？さう思ふとかれ等を占領し得ない妬ましさが、遣る瀬なくも寂しさにまつはつて來る。

囃しに疲れたやうな屋臺は再び組みたてた場所に戻つて來た。その物音にむつくり刎ね起きて、母の留めるのも聞かず私はまた表に飛び出して行つた。けれども間もなくすると、立つて居ても襲つて來る眠たさに堪えられなくなつて、また家にかへつて來た。それでも最後と云ふことにどうしても心殘りが

して、程近く木の音が聞え出すと、強情を張つてばん〳〵におぶはれて母と共に見に行つた。下の人込みの中に交つて、仰向いて一生懸命見瞶めて居る舞臺の上に、時々顔がぼんやりなりかけると、『ヤアうろたへたか金藤治、勝負に勝つた姉娘、なぜ切つたなぜ殺した……』と聞き馴れたおりんの聲がひゞく。三日間夜晝通しの幕毎に引き出されて、その聲はいぢらしくも嗄れかけて居た。

もうこそと一度下りた幕がまたする〳〵と上つて、並んで手を支へた眞ん中に粂三が、『お當町もこれにてお名殘り……』云々と口上をのべる。お京は立つて千秋樂を扇の要に舞ひおさめて手をつかへた——。

その夜のうちに若者達が集つて、大方の仕組みを解く物音を聞きながら私は間もなく眠りに就いた。

梨の皮、栗の殼、菓子の袋や、薩摩芋の喰ひかけなどが、踏みにじられ〳〵て散らばつた宵の狼藉も、掃き清められた朝のひつそりとして、庇に挿し並べた作り花の、櫻の色はふけ褪めて居た。二階の障子はひたりと閉まつて、まだ誰一人として目覺めた氣はひもない。揃ひを脱いで平常着に着替へた侘しさに、襟の汚れがひいやりと肌を刺して、なんとなくむづかりたい心を押へて私は學校に行つた。

祭りの名殘りに、自慢をけなし合ひでまたしても幼稚な喧嘩、先生に笑はれて顔を赤めて默り合つても、猶暫くは町々に私達の心が別れて居た。

歸つて見ると、踊り子達はもう出立の用意が出來て、荷をつけた馬車馬はふう〳〵と息をふきながら

足搔(あが)きをして居た。

『おかみさん、どうも長々お世話様……』

『おかみさん、またどうぞ』

人々はまち〳〵な身なりをして居た。明日(あす)からお祭りになるといふ××町に買はれて行くのである。舊会津街道に添つた其町にはまだ汽車がなかつた。四里ばかりを辿つて、日昏れまでにはそこに行き着かねばならないと言つて居た。

人々は草鞋を履いた。お京もお鈴も珍らしさうにして喜んで履いた。千代野は座元に背負はれ、おげんは留さんの背中を借りた。疲れた時には馬車の荷の上に乗せるからと言つて居た。盲目の老人は荷と荷の間に僅かの席を取つて貰つて、心細さうに乗せられた。

折から生憎降るともなく降り出した雨に、一行はハタと當惑の面をしたが、おりんお才など、比較的いゝ着物を着て居たのはしほたれた單衣に着替へて、有合せの傘や洋傘を翳した。番傘や蛇の目もあれば合羽の人もあり、まち〳〵な裝ひが如何にも物哀れに見えた。

『ようおいんなはりやせう！生憎うつとしいお天氣で……』

私は襷をはづして見送る母の袖のかげに隠れるやうにして居た。馬方が手綱を取ると馬は心得たやうに一足ふた足歩き出す――ぞろ〳〵と出掛ける一行の中から、私の懐しいお京は、ふと振りかへつてにつと笑つて慌てゝ顔をそむけた。

一行が半里足らずも歩いたと思はれる頃、氣紛れな空は白い光りを現はして居た。

三

町から村へ、村から町へと買はれて行く秋祭り頃の働きが、彼等一家内の一年の生活を支ゆる代を作るのだといふ。會津とよばれる雪國の小さな町に埋れて、踊りや科白の誓古と、古衣裳の縫ひ直しなどにその日を送つて、さゝやかな煙りをたてる彼等が冬籠りの間に、私は九つの年を送つた。

手足や耳の霜燒けも、やう〳〵痛み痒みが薄らいで、禿のやうな痕を殘して癒へる頃には、淡雪が降つても甲斐のなさゝうに、生暖い雨を誘つて力なく降りて來る。その一雨〳〵毎に暖かさを増して行つて、包みを解いたねこやなぎの新しい銀色が、一日〳〵とふくらむで行く。堤の枯草にちら〳〵青いものを見出したのも昨日と過ぎて、蔀句までに蓬の生長を願ふ少女心に、春の日はのどかに野の匂ひを運んだ。

稻妻の素早い閃きが、稻の花を開くと人に信じられて、蒸し暑い夏の日を喘ぎながら送つて居るうちに、いつか天の川の流れに北斗七星の光り増す頃ほひとなる。秋祭りは近づいた。蠶の上出來が町の人氣を引きたゝせて、此處にも山車、あの町にも屋臺と騷ぎたつ。

元町の屋臺には今年も亦鳴元の一座が乘るといふ噂さが專らになつた。宿はやはり私の家と云ふので私はどんなにその日を待つたらう。

お祭りの氣分はいつものやうに町と人の心とを襲つて、何がなしそわ〳〵として居る前の日の日昏れ方、どや〳〵と店の土間の薄闇に人の氣はひがした。

『踊り子が來た〳〵』と誰となくいふ聲がしたので、急いで出て行つて見ると、一行は疲れたやうに框に腰を下して濺ぎの水を待つて居た。近くの村の祭りを午前にすまして、やう〳〵間に合ふまでに急いだのだといふ。洋燈よ盥よと母やばん〳〵の騒いで居る物音を聞きながら、私は先刻表を通るのを見た隣り町の踊り子のことを考へて居た。それは二本松から買はれて來た藝者や半玉達の一座で、友禪の長い袖や赤い半襟など、すべて華かな粧ひをして居た。それに引き替へて我町の踊り子のなんと云ふ見窄しさだらう！訛りのある言葉、田舎じみた身なり！私はさびしく立つて一行を見渡した。

『昨年はいろ〳〵御厄介様になりました。今年も亦大勢お世話様になっりやす』

帳場で挨拶がすむと、我勝ちに去年の二階に上つて行つた。お京は私を見てにこ〳〵して居たが、別に物も言はなかつた。みんな赤い足をして梯子をのぼつて行つた。板の間に亂れた水氣の足痕が、吊りランプの光りに照らされて暫くは殘つて居た。

一年は變化の上に於いて大きな仕事をして居た。そしてそれは殊に私達少年少女の體なり心なりの上に著しかつた。座元夫婦は相變らずに見られたけれども、踊り子達の背が平行して成長して居る中に、粂三が最も發育の盛りを示して、お京の頰はます〳〵肉づいて赤く、お才はいよ〳〵背持ちになつて居

た。

殊に驚かれたのはお鈴に就いてゞ、去年はあんなに麁末に扱はれて居たものが、劬はられ大事にされて居ることで、一年間の誓古が潜んで居た彼女の藝術的才能を現はしかけたものか、去年のおりんの位置を奪つて居ることであつた。體だけは他の子のやうに際だつて育ち目(そだめ)も見えなかつたけれど、脆弱さうな體つきの割にはさう弱いのでもないらしかつた。

おりんの藝は劣つて居た譯ではなかつたけれど、他が上達して居る割には抽んでなかつた。そして役々も見ばえのしないところにばかり使はれながら、奪はれた寵に對する不平もないらしく、自分は自分といつたやうな顔をして元氣に働いて居た。

それから一座に『駒さア〳〵』と呼ばれて居る少年が一人殖(ふ)えた。體ばかり大きくて能なしの、いつもヤア〳〵と出て來る取手にばかりなつて、その頓馬な聲を私達子供にも馬鹿にされて居た。外にも一人女が加はつて居たが、これも取手と腰元にばかりなつて出て來た。すべての下働きは駒とこのお末といふのがやつて居た。

『豐ちやア』

一種の節をつけて、お鈴は馴々しく私に言葉をかけるやうになつた。

『二階さ行つて見ねがい』などゝ風呂の歸りなどに私を誘ふので、私もちよい〳〵顔を出すやうになつた。粂三からお鈴お京お才おりんといふ順に並んで、一列の臺に各々の鏡をたてゝあつた。夜はその脇

に一本づゝの蝋燭が灯された。刷毛やら兎の手やらのごちや〳〵にないつて居る小凾を掻き廻しながら、おりんはよく人の言葉尻を取つたり口眞似をしたりしてみんなを笑わせて居た。どつと人が笑つても自分はけろりとしてせつせと顔ごしらへをして居るので、後の方に鬘を結つて居た座元が、思はず貰ひ笑ひすることなぞもあつた。

『粂さ、これでいゝかい』と出來上つた顔を見せて、お京は母親の揃へて置く衣裳の方に立つて行つた。

『馬鹿、左に結ぶんだ！』と暫くして氣忙しさうに叱る母親の聲が聞えた。お京は一寸振り向いた人達の顔を見て極りの惡るさうな薄笑ひをしながら、鬘にしめた紫の布を結び直した。病身の心得の松王になつて居るのである。お京は涙脆く笑ひつぽく、何かにつけて感情的であつたので、自分が悲しい主人公に扮つた場合など、時々汗かとも思はれるやうな涙を出して居るのを私はよく見た。そしてそれが何となく好きであつた。

或日のこと、お鈴はふと口の中に呟いて居た臺辭をとめて、

『豐ちや、狐つていふ字どう書くの？』と聞いた。

『狐つていふ字がい、 狐つていふ字はかう書くのい』 と私は少々得意な氣持ちで教へてやつた。けれども間もなく葛の葉子別れの場の幕が開いて、夫の保名に疑はれた葛の葉が、今はと狐の姿になつて、襖や屏風を飛び越えながら、泣く子を賺し〳〵障子に書く歌の、戀しくばたづね來て見よをすら〳〵と書き流した時に、足の指や口を使ふのに感心したばかりでなく、その見事な手蹟なのに驚いてしまつた。

そしていつからとなく覺えた神童といふ言葉を胸の中に繰り返した。

子供達の樂しいを今度はお正月までと預つて、間もなく霜は降りて來た。大寒む小寒む山から小僧が飛んで來たと唄はれて、那須下しのから風に霰こん〳〵降る日が近づく。

三度目に私が彼等を見たのは、或年の正月町の豐島座といふ常舞臺に、子供芝居の興行があつた時で、その年の夏の暴風雨が祟つて、どこの秋祭りもさびれて過ぎた爲めに、思つたやうな實入りもなく、冬場稼ぎに馴染みの土地を便つて、はる〴〵雪を分けて出て來たのであつた。

その二三日前から茶店や床屋湯屋などに、女子供芝居と云ふビラが下つて、勘亭流の文字で藝名が書いてあつた。初日の日は例の道順にだん〴〵太鼓の音が近づいて來ると、

『顔見世だ〳〵』と人々は店や往来に飛び出して見た。

役者達は出來得る限りの粧ひをして、それも少しも見映えはしなかつたが、藝名の短冊を櫻の花につけて、車の脇にさして練つて歩いた。粂三は一番後の車に、大人のやうに腕組みをしながら乘つて居た。かうして見れば皆顔色は惡るかつた。

その日お鈴と粂三は一座を代表して、手拭ひに丸札を二枚づゝ添へて世話人の家を廻つて歩いた。私の家でも丸札を貰つたので、幾らかを熨斗袋に包んで私は姉と一緒に木戸を通つた。

棧敷から見ると大きな舞臺にはまだみなその體が小さかつた。それでも間延びせずにやつて居るのは

年々に上手になつて來るしるしだといつて、隣りの一群れが頻りに感心をして居るのを、私は嬉しいやうな氣がして聞いて居た。けれども私の大好きだつたお京が、一二年見ぬ間に見違へるほどだぶ〳〵と肥つて、舞臺に出て居ながらともすれば笑ひ顔になるのが氣になつてならなかつた。

『お京の奴、色氣がつきあがつたな――』

後の方で誰かゞ小聲で言つて二三人がくす〳〵笑つた。

粂三の口せきは傍で見る目も辛いほどたゝなくなつて居て、口を曲げるのが癖だつたそれが一層ひどくなつて居た。

『駒は自分が藝が出來ないものだから、粂三を妬んで聲のたゝなくなる藥を呑ませて逃げて行つた――』

かういふことが私達子供の仲間に言ひ觸らされた。その時は駒もお末も一座に加はつてなかつたので、私達は全くそれを眞實にした。けれども今になつて思ふのは、若しやあの時が聲變りではなかつたか――と考へるのである。

一日〳〵を暮して一年を過して、人はいつの間にか年を取つて居た。

今年私は父母の墓參りかた〴〵、三四年ぶりで故郷を見舞ふことが出來たのであつた。時は丁度九月に入つて半ば近かつたので、黄ばみそめた那須野の栖林に、赤みかゝらうとした夕日の光りを見ながら、線路の土手に咲きほこる桔梗女郎花の上に薄れて行く日を惜しみ〳〵過ぎて、全く日昏れてから懷しい

呼名の驛に着いたのであつた。そこに私は先祖傳來の土地に固着して居る一二の親戚に留められて、思ひの外の長逗留をした。そして圖らずも昔の通りな秋祭りに遇つて、思ひ掛けなく鴫元の一座に顔を合した。此土地にも五六年振りで來たのださうであつた。

昔の我家の屋敷跡に郵便局が建つて、その二階が電話の交換局になつて居ると云ふ慌たゞしい文明に呆れるよりも、私には猶彼等がいつまでも同じ塊(かたま)りを守り育てゝ、容易く解散の運命に進んで行かないといふことが、不思議でもあり珍らしくもあつた。たゞ粂三とお京の姿が一座に見えなかつたのが、驅落ちなどゝいふ言葉を面白がる私の稗史的な氣分を滿足させると同時に、一團に取つては禍ひなさうした事件が、僅少で濟んで居るのを祝福した。

座元の内儀は去年腦溢血で死んださうである。座元の頭にはよほど白髮が殖えた。今ではもう後見の必要があまりなくなつたので、拍子木を握つては麻裏を履いて、幕毎に靜々と宿と屋臺の間を往復して居た。藝子達も若者の背中を借りることは不可能になつたので、屋臺の行き復りには人力車を用ゐて居た。そして十二ばかりと七つ位な子を二人貰ひ集めて、姉達が藝を仕込んで居るのだつた。

久しぶりな人氣を集めて、笠揃ひの夜の式三番に、鼓と太鼓に素顔で出たお才やおりんの分別顔を見て私は今更のやうに自分の年を繰つて見ない譯には行かなかつた。お才などはかれこれ三十にはしが出た位であらう。

町から買値の交渉があつた時に、若松で東京の役者に鍛(きた)はれて藝も上達したからと答へたさうである

が、見馴れた出し物に變りはなかつたが、時々役々に自分〳〵の工風が見えて居た。昔に變らぬ顔容ちと體をして居るのはお鈴で、世話女房役が一番手のものだつた。粂三とお京に拔けられた一座は、お才の男形を無くてならぬ達者なものにして居た。何處やら肩の丸いのと、手足の福々として居るのを除いては、聲も科(し)ぐさも全く男になつて居るおりんの敵役は、驚く程太股の異常な發達をさせて居た。過激な動作が馬鹿肥りに體を大きくして居たので、見馴れぬ女と注意して見て居るうちに、ふと何處かに殘つて居る幼な顔に初めておげんの成人したのを見出して私は驚いた。菊畑の皆鶴姫になつて出た小作りな女の顔が、昔舞臺に眠つた千代野そつくりではあるが、それにしてはあまりに聲が若く、子供の樣に見えるので、後から加はつた子だらうと考へ直して居たら、それはやつぱり千代野だつたさうである。

義理と人情に本能の進退を縛められた種々の女や、愛も憎みもたゞ主君の爲めにのみした數多の男の魂を生計の糧にして、假裝の男に戀の詞を囁くのに馴れながら、女の生涯を何時何處に如何(どう)して終へるのであらう？

祭りの濟んだ翌日の、大風の引いたあとのやうな町を、私はこんなことを考へながら都へと歸つて來たのであつた。

誰から聞くともなしに聞き覺えて居たことであるが、彼等の使つて居た白粉は陶(とう)の土(つち)であつたと云ふ——。

【入力者注】以下の修正を加えました（数字は底本の頁―行）。

58-7　箝つた。→嵌つた。

底本：「新潮」大正二（1913）年一月號
入力：小林　徹
公開：令和四年二月十一日
修正：令和四年二月十三日

水野仙子「作品年譜」に戻る